

## 博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名(フリガナ) 在住国名	金 寶賢 (キム ポヒョン) 韓国
所属・役職	高麗大学校グローバル日本研究院・研究教授
招聘回(招聘研究期間)	第14回(2019年9月1日~2020年8月31日)
受入機関	立命館大学
招聘研究テーマ	植民地期「朝鮮半島の歌壇」と「日本の中央歌壇」の繋がりに関する研究 —海を越えてきた歌人たち—
研究目的	本研究は、植民地期の朝鮮半島で活動していた日本人歌人(「渡韓歌人」と彼らの活動を伝える短歌雑誌、歌集などを対象にしている。従来、植民地期朝鮮半島で展開された短歌は「植民地日本語文学」というカテゴリの中で論じられてきた。本研究は、研究の対象とする時間と空間を拡げ、同時代の「日本の中央歌壇」との関係性、朝鮮半島で活動した歌人たちの活動内容、そして朝鮮半島での歌人としての経歴が日本帰還後どのように繋がっているのかなどについて研究し、日韓両国に有効な研究結果を出すことを目指す。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか</p> <p>一次資料の収集・閲覧のち、受入担当教授との相談や他の研究者との交流を繰り返し行った。</p> <p>①(前半)短歌雑誌『ポトナム』研究:前半は、朝鮮半島で刊行された短歌雑誌『ポトナム』に注目した。1922年京城で創刊された『ポトナム』は、2020年に100周年を迎えた長い歴史を持った短歌雑誌である。韓国における研究ではこの『ポトナム』を「植民地日本語文学」という枠組みから捉え、朝鮮半島でその編輯と印刷が行われた1年あまりの時期(1922年4月~1923年6月)に限って研究がなされてきた。しかし日本にその拠点が移されてからも『ポトナム』が朝鮮半島との関わりを持っていたことに着目し、1922年(創刊号)から1944年(第23巻)までの『ポトナム』を対象とした精緻な読解を試みた。</p> <p>※「一次資料の収集・閲覧」:立命館大学に「白楊荘文庫」所蔵の『ポトナム』を利用。</p> <p>※「受け入れ教授との相談」、「研究者との交流」:現在『ポトナム』の現代表中西健治先生との交流を持ち、研究に関する情報を得ることができた。また受入担当教授との相談を通じて、研究の方向性、内容などを具体化し研究にとりかかった。</p> <p>②(後半)過去に、朝鮮半島での短歌活動歴を持つ歌人の研究:後半の研究では、朝鮮半島で活動した歌人(渡韓歌人)に関する研究を行なった。コロナ感染拡大の影響下で帰国し、再来日ができず、歌人についての基本資料が不十分であったため、以下の文献・サイトを参考にして、1)渡韓歌人の調査・選定、2)選定歌人の朝鮮半島での活動調査・整理、3)帰還後の日本における活動の調査・整理、資料収集、4)帰還前後の活動を統合・分析を行った。</p> <p>※「一次資料の収集・閲覧」:『白楊荘文庫目録』(立命館大学図書館)、『ポトナム叢書』(新音書房)、『西方博報朝鮮文庫目録録』(東京経済大学図書館)、『韓半島刊行日本伝統詩歌資料集』(高麗大学校日本研究センター)、『開花期・日帝強占期(1876~1945)在朝日本人情報辞典』(高麗大学校日本研究センター)、 <a href="https://ndlonline.ndl.go.jp">https://ndlonline.ndl.go.jp</a>(国立国会図書館オンライン)</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか</p> <p>①(前半)短歌雑誌『ポトナム』研究:1922年4月(1巻)~1923年6月(23巻)までの『ポトナム』を閲覧・調査した結果、発行所を基準にして①「京城発行所時代」、②「京城・東京発行所時代」、③「東京発行所時代」の三期に分けることができた。また、日本と朝鮮半島を横断していた『ポトナム』の史的展開を各時期別に検討し、以下のような研究結果を得ることができた。</p> <p>→「朝鮮歌壇」の起源と展開の確認(「内地」から渡韓した「歌人」らが主導し、「中央歌壇」と連携し「中央歌壇」の系統</p>	

を継承した状態で、短歌が日本国外で「定着」、「拡散」、「解体」していく過程を確認した。)

→ 植民地に存在した短歌結社『ポトナム』の支部の発見とその役割の確認。

→「地方歌誌」が「中央歌誌」に発展していく独特な流れの確認(一国の文学史という枠組みの中では記述しえなかった領域に対する研究の必要性)。

②(後半)過去に、朝鮮半島での短歌活動歴を持つ歌人の研究:まず、朝鮮半島で刊行された短歌雑誌、歌集、参考文献などを活用し、「渡韓歌人」を8人に絞り込んだ。また、朝鮮半島に関連した歌人と歌集を調査する過程で、過去に朝鮮半島と関係性を持った歌人と歌集が新たに判明した。このような研究資料をまとめ、今回は、日本と朝鮮半島を往来しながら、数多くの歌を詠んでいた頼田島一二郎に注目し、彼の帰還前後の活動をつなぐ作業を試みた。特に、頼田島一二郎の歌集『この部屋の壁』(1962)に収録されている引揚げの歌は、これまで注目されてこなかった「渡韓歌人」の「帰還」の過程が表われている重要な資料であった。

### 3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))

・「短歌雑誌『ポトナム』の京城発行所時代(1922年4月~1923年6月)―朝鮮短歌史の始まりと朝鮮歌人の誕生」『日本研究』第33輯、高麗大学グローバル日本研究院、2020.2

→本論文は、1944年までの『ポトナム』を、発行所を基準として「京城発行所時代」・「京城・東京2か所発行所時代」

・「東京発行所時代」の三期に分けて捉えることを提示している。そして、その三期の中「京城発行所時代」

(1922年4月~1923年6月)(第1巻 創刊号~第2巻 第6号)に焦点を当て、①朝鮮歌壇の系譜形成、②専門歌人の誕生と創作の場の提供、③歌集の企画・発刊を、「朝鮮歌壇」における『ポトナム』の主な功績としてあげた。また『ポトナム』同人の合同歌集『莎鷄集』(1923)の分析を行ない、各々の生き方と個性を重んじていた初期『ポトナム』の歌風も明らかにした。

・「短歌雑誌『ポトナム』の「京城発行所時代」以降(1923年6月~1944年3月)の史的展開研究―朝鮮半島との関わりを中心に」『日本学報』第124輯、韓国日本学会、6月投稿(審査結果待ち)

→本論文は、『ポトナム』の「京城発行所時代」に続き「京城・東京2か所発行所時代」・「東京発行所時代」に注目し、その史的展開を追ってみた。特にその流れの中で、京城ポトナム社と朝鮮半島各地に広がっていた『ポトナム』支部のように朝鮮半島との関わりを重点的に見極めることを目的とした。「京城・東京2か所発行所時代」を通じては「東京・京城ポトナム社」が編集と印刷などを協力していたことを確認し、「地方歌誌」が「中央歌誌」に編入される過渡期を分析した。次に「東京発行所時代」に入ってから「京城ポトナム社」は消滅したが、朝鮮半島の各地では『ポトナム』の支部が形成され、定期的な例会・歌会が行なわれていたことを確認した。また、朝鮮半島の支部と日本のポトナム社を繋いでいた百瀬千尋の活躍は、海を越え、両地域を短歌で結んでいた「渡韓歌人」としての役割をしていたことがわかった。

○その他の活動

・2019年11月から国際俳句交流協会の理事の黒川悦子さんとの交流をきっかけに、ネット句会に参加している。

### 4. 今後の活動予定

今後は、まだ調査中にある後半の研究に集中し、「渡韓歌人」に関する資料の補足と収集を続け、「主要渡韓歌人の歌集情報」と「朝鮮半島に関わった歌集目録」を更新していく予定である。また、これらの資料を分析した結果は、9月までに論文としてまとめたい。